



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	仏教国としてのロシア帝国：二つのカルムイク人社会に関する考察 [全文の要約]
Author(s)	井上, 岳彦
Description	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。 https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(学術)
Dissertation Number	甲第11591号
Issue Date	2014-12-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/57737
Type	doctoral thesis
File Information	Takehiko_Inoue_summary.pdf



北海道大学大学院文学研究科
博士（学術）学位請求論文（2014 年度）

仏教国としてのロシア帝国：
二つのカルムイク人社会に関する考察

井上岳彦

要旨

本論文は、二つのカルムイク人社会の僧侶と国家の関係を宗教管理制度による臣民統治という観点から考察し、ロシア帝国が仏教国に変容する過程を論ずるものである。

第二次チェチェン紛争後、ロシア国民の再統合が推し進められる中で、現代ロシア国家は公認宗教のもつ公共機能に大きな期待を寄せてきた。チベット仏教もまたそのような公認宗教のひとつである。また近年、仏教界からロシア現体制を神聖視する言説も顕著になった。以上の状況において、18世紀以来のロシア帝国とチベット仏教徒との歴史的関係を理解することは、我が国においても喫緊の課題となっている。

ロシア帝国内のチベット仏教徒の中でも、カルムイク人の仏教社会はその重要性にもかかわらず、度重なる史料の散逸など様々な要因によって、十分に研究されてこなかった。そのため本論文はロシア国内の10の文書館を利用することで、その史料的な問題を補った。利用した文書館は、ロシア帝国外交文書館（AVPRI, モスクワ）、アストラハン州国立文書館（GAAO, アストラハン）、ロストフ州国立文書館（GARO, ロストフ・ナ・ダヌー）、

スターヴロポリ地方国立文書館（GASK, スターヴロポリ）、ロシア科学アカデミー東洋写本研究所（IVR RAN, サンクトペテルブルグ）、カルムィキア共和国民族文書館（NARK, エリスタ）、ロシア国立図書館手稿部（OR RNB, サンクトペテルブルグ）、ロシア国立古法文書館（RGADA, モスクワ）、ロシア国立軍事史文書館（RGVIA, モスクワ）、そしてロシア国立歴史文書館（RGIA, サンクトペテルブルグ）である。

論文は七章で構成される。前半（第1章、第2章、第3章、第4章）においては、ロシア帝国の各地域でなぜ異なる仏教政策が取られたのかという点を論じた。ロシア帝国はその多様な社会を統治する際に、権力の現地仲介者を必要とした。そこで宗教政策の相違は、選出した仲介者の相違に起因すると仮定し検討を行なった。

第1章ではロシアでの最新の研究をもとに、ザバイカル・ブリヤート人社会の統治と仏教政策について論じた。ブリヤート人社会において決定的な意味を持ったのは、仏教国家である清朝との国境の存在、そしてシベリアの人的資源の絶対的不足だった。シベリアにおける清朝との競合が顕在化した時、ロシア帝国はブリヤート人仏教僧侶を仲介者に選出し権力を与えた。そのためロシア帝国支配下において、仏教は急速にシベリアに拡大した。ザバイカル・ブリヤート社会を参考にした上で、本論文が考察する問題の所在を明らかにした。

第2章では、ヴォルガ・カルムィク人貴族の政治を考察した。ロシア帝国の特徴は政策的な一貫性の欠如にあり、カルムィク人政策は現場の経験的知識、東洋学の学術的知識、ロシア帝国の一般統治原理のあいだで常に揺れ動いていた。ヴォルガ・カルムィク人社会は南北のイスラーム連帯をステップで断ち切る役目の一翼を担い、統治の仲介者としてカルムィク人貴族が選出された。「開明」貴族にはカルムィク人の農業・定住化、あるいはキリスト教化の道を達成させることが期待されていた。

第3章では、痘瘡予防接種事業におけるヴォルガ・カルムィク人僧侶の動員を取り上げた。痘瘡（天然痘）の根絶というロシア近代医学の「輝かしき歴史」の中で、種痘士とし

て活動したカルムイク人僧侶の歴史は特異なものだった。カルムイク人の身体管理の問題は次第に仏教政策と後見監督政策の相克の場へと化し、ロシア帝国のカルムイク人統治の矛盾が顕在化した。

第4章はドン・カルムイク人社会に焦点を当てた。ドン・カルムイク人はソ連時代の本質主義的民族史観によって、これまでその重要性を見落とされてきた。ドン・カルムイク人社会の統治において特徴的なことは、貴族の不在を補うために、僧侶を仲介者として選出したことである。ドン・カルムイク人には、コサック勤務があり忠勤に励むように精神的に鼓舞する必要があった。陸軍省やドン軍も僧侶に大きな期待をした。彼らの間ではカルムイク人のコサック身分への統合が行なわれるとともに、仏教を介したロシア帝国への統合が推進された。

このように仏教政策に関して言えば、ロシア正教会型の僧伽を作り僧侶の定員を設定し帝国と臣民の精神的な紐帯とするという基本的な部分において、仏教に対する管理制度自体は共通していた。しかし現地仲介者の選択はその社会の未来の選択であり、それぞれの仲介者に適合した個別の統治政策が仏教政策に大きく影響を与えたのである。

後半（第5章、第6章、第7章）では、ロシア帝国が仏教国に変容する過程を論じた。

第5章は聖地巡礼について考察を行なった。ロシア帝国におけるチベット仏教は、国外に宗教拠点がある「外国信教」だった。つまり最大の宗教権威はロシア帝国のコントロール外にあり、臣民である信徒と宗教権威の接触はロシア帝国にとって大きな脅威だった。さらに仏教の最大の保護者だったのは、他でもないロシア帝国の中央アジア・シベリアでの競合相手である清朝だった。聖地巡礼は二つのユーラシア帝国の国境を越える行為であり、外交カードとして利用され次第に衰退した。しかし経済的成功を背景に、19世紀後半に巡礼が再開された。ラサやウルガの僧侶はカルムイク人という仏教徒を「再発見」し、チベット仏教世界の急速な一体化が進んだ。

第6章は、カルムイク人のあいだで想像されたロシア仏教皇帝像を解説する。まずユー

ロシアに普及していた「白いツァーリ」信仰とカルムイク人の関係を論じた。次にドン・カルムイク人僧侶のロシア仏教皇帝像について考察した。ドン・カルムイク人のウリヤノフの著作は、カルムイク人僧侶が帝国秩序の中で最終的に到達したロシア皇帝像として位置づけられる。そこではロシア皇帝は清朝皇帝とともに、衆生を救済するために菩薩の化身として現世に現れた存在であるとされた。この言説は、第5章で論じられたラサ巡礼の復活によってもたらされた知的交流の中で生み出されたのである。

このように、ロシア政府が設定した僧伽はそれぞれ個別に管理され、それぞれの僧伽においてそれぞれのロシア皇帝と臣民の結合の物語を作り上げたといえる。僧侶の想像力はそれまでの「チベット仏教世界」を変容させ、ロシア帝国を包摂した世界を描き出したのである。本論文はロシア帝国内の仏教政策が模索される中で、チベット仏教徒が主体的にロシア帝国を仏教国へと変容させる過程を論じた。